

「今できることプロジェクト×栗原市」に参加した尚綱学院大学の活動



「今できることプロジェクトとは」

河北新報社の「今できることプロジェクト」は、2012年9月から、復興のために今何ができるのかを賛同企業の皆様、読者の皆様、河北新報社が同じ立ち位置となって一緒に考え、実際にアクションを起こすことを目的にスタートしました。これまでは被災地を巡るバスツアーのほか、「女川ホスター展」の実施や142年の歴史に幕を下ろす仙台市内の小学校のメモリアルイベントのお手伝いなどを行ってきました。そして2015年度は新たな枠組みをつくり、2008年の岩手・宮城内陸地震、2011年の東日本大震災による風評被害に遭っている栗原市と連携し、1年間を通して栗原市の自然や食など、多彩な魅力を感じていただけるように、バスツアー、新聞紙面、ウェブなどを通して情報発信をしてきました。尚綱学院大学はこのプロジェクトに協賛し、学生たちが1年間栗原の魅力をたくさん見つけました。

学生ミーティング



今できるプロジェクトの企画であるバスツアーに向けた学生ミーティングを全7回行いました。ツアー前は事業内容の企画、立案を行い、ツアー後は反省点や感想の共有を行い、次回実施に向けた改善点を話し合いました。

- 第1回（5/21日）：「全バスツアーに向けた内容の企画、立案」
- 第2回（5/28日）：「前回ツアー内容の感想の共有や報告」
- 第3回（6/4日）：「栗原市の現地取材の打合せ」
- 第4回（6/11日）：「現地取材の振り返り」
- 第5回（6/18日）：「チームリーダーの選出」
- 第6回（6/23日）：「前回バスツアーの振り返り、次回バスツアーの企画、立案」
- 第7回（6/30日）：「次回バスツアーの企画、立案」

ライター講座の開催

栗原市の魅力を多くの方々に知ってもらうために、学生プロジェクトチームの学生に調査する力、発信する力を付けるため行われました。講師は、河北新報社デジタル推進室主任の大泉大介氏。「取材を成功させる10の法則 確かな記事を書く7つの鉄則」という題でお話いただきました。また、栗原市役所から、今できることプロジェクト×栗原市の担当職員の方が講座に来てくださり、「学んだことを活かして、栗原市の魅力をPRしてほしい」との激励の言葉をいただきました。学生たちは栗原市を訪れ、ライター講座で習ったことを用いて、魅力の聞き取りを行いました。



【プロジェクトに参加した学生 学科別（氏名、学年）】

<表現文化学科> 阿部 菜々子（1年）、千葉 美紗樹（1年）、 佐藤 浩貴（1年）、王 孟婷（留学生）、呉 迪（留学生）	<人間心理学科> 高橋 唯（1年）
<子ども学科> 高橋 駿（3年）、渡邊 尚弥（3年）	
<現代社会学科> 畠山 拓（2年）、熊谷 誠人（2年）、平井 貴文（2年）、植野 夏季（3年）、山田 裕貴（3年） 泉田 佑弥（3年）、伊藤 心力（3年）、小原 亮汰（3年）、大町 裕也（4年）	
<健康栄養学科> 吉田 由美（1年）、渡邊 あかり（1年）、黒森 春香（1年）、三好 双葉（1年）、齋藤 真慧（1年）、大竹 直輝（2年）、遊佐 奈緒子（2年）、大谷 葵（3年）、佐藤 綾香（3年）、鈴木 七枝（3年）、加藤 怜菜（3年）、三浦 優香（3年）、菅原 愛（3年）	
<環境構想学科・生活環境学科> 枝松 菜央（1年）、鮎澤 恵（1年）、手塚 雄太（2年）、阿部 杏圭（2年）、猪狩 裕子（2年）、氏家 古都海（2年）、伊東 桜（2年）	
【プロジェクト実行委員】（関係教員） 黄 梅英教授（現代社会学科）、木村 清教授（現代社会学科）、片山 一男教授（健康栄養学科）、渡邊 千恵子教授（環境構想学科）、高橋 睦子准教授（健康栄養学科）、大川 亘准教授（環境構想学科）、内田 龍史准教授（現代社会学科）、藤本 吉則准教授（現代社会学科）、庄司 則雄（連携交流課長） 事務局（政策企画室）	



尚綱学院大学 学長
合田 隆史
東京大学法学部、ミシガン大学大学院修了
(MPA)2014年4月より本学学長、同総合人間科学研究所（尚綱総研）所長
文部科学省国立教育政策研究所フェロー

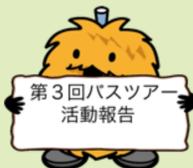
尚綱学院大学は、地域と共に歩み、東北の力になれる人材の育成を目指しています。自分たちに「今できること」は何か？ という問いは、そんな本学で学ぶ学生一人一人が、自らに問い続けて欲しい課題です。そしてその先には、未来に向かっての「夢」があるのだと思います。本プロジェクトに参加した学生たちが、栗原という「現場」に飛び込み、行動し、それを通じて学び、考えたということ。それ自体、学生たちにとって一つの「今できること」だったと言えるかもしれません。それがやがて栗原の、さらに東北の未来を切り拓く力へとつながっていくことを、大いに期待しています。



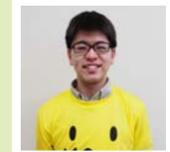
「今できることプロジェクト×栗原市」に協賛した尚綱学院大学の目的は栗原市の地域活性化に応援したいという地域貢献のほかに、学生に体験学習をさせたいにもあります。教育的な観点からみれば、実際に本学の学生は5回のツアーの中で、田植えなどの農業体験、栗原市の文化や魅力を感じられる観光をしながら現地の人々と接触の機会を得たことを通じて、地方の過疎化状況を肌で感じ、栗原の人々の悩みもよみとることができたのではないかと思います。このことは東北をはじめとする地域に貢献できる人材を育成することをビジョンとする尚綱学院大学にとっては学生に地域の現状を知りたい機会となりました。また、5回目のツアーに栗原市の特産物「りんご」を使用したスイーツづくりの企画を実施し、ライター講座を受けながら現地の取材活動を行い、ツアーに直接貢献したと同時に、立派な実践的学習にもなりました。その学習成果を生かされることを楽しみにしています。学生たちには今後も栗原市に関心を持ち、繋がりを持ち続けてもらいたいと思います。



これからも栗原市を応援していきます。



開催日：2015年9月27日
一般参加者：22組56名 参加学生数：7名
ツアー概要：「手で刈る稲刈り体験（棒掛け作業）→昼食（地元食材のお弁当）→あやめの里（買い物）→有限会社くりこま高原ファーム見学」



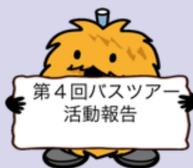
尚綱学院大学参加学生
現代社会学科 3年
泉田 佑弥

私は、このツアーで運営の補助をするだけでなく、自ら参加者や現地の案内役の方に取材をする機会がありました。インタビューするにあたり、少ない時間で欲しい情報を聞き出すことや話を聞きながらメモを取るなどが大変なこととは思いますが頑張りました。そして取材した内容をまとめ、このツアーで体験した内容を多くの人に広める活動としてブログを作成しました。内容には、取材した方に対して失礼なものになってはならないので、間違いがないように細心の注意を払い作成することを心がけました。ツアーを通して、取材のやり方や魅力を伝えられるような文章の工夫などを学ぶことができました。



尚綱学院大学教員
高橋 睦子 准教授
健康栄養学科
担当科目：公衆栄養学概論 他
研究分野：公衆栄養学

平成の大合併で、栗原市として誕生して10周年。合併前の10地区は、地域に根差した素晴らしい財産（人、物、自然、食文化、伝統等）が豊富で、今回のツアーではその一部ではありましたが、異世代の方々と交流を通し、脈々と受け継がれて、次世代に繋がるという歴史や魅力を満喫できました。学内で行われたミーティングでも、栗原市の強みやワクワクすることとして豊かな自然、郷土料理、ひとの温かさ等が挙げられました。しかし一方で1日では回りきれない程の広い面積、仙台からの移動で片道1時間掛かるなどの声も。このように様々な課題を理解し、解決に繋げるノウハウを学生は、改めて地元の皆様から気づかれました。今後、大人から子どもまで楽しく参加でき、見学に止まらない参加型のイベント（例えば長屋門の修復や山菜取り、伝統行事、食と器、温泉と健康）等など、今回触れたことができなかった栗原市の宝を、学生が地元力を引き出せるように、若い視点で提言出来たら、素晴らしいことではないでしょうか。次年度以降もぜひ、尚綱学院大学と栗原市で協力しあい、連携していきたいというの挨拶も交わされたら聞きます。それは今回の、今できることプロジェクト×栗原市の大きな成果ともいえます。今後もっともっと栗原市の良さを再認識してくれるファンが、育っていくことを願っています。（栗原市出身の高橋でした）。



開催日：2015年11月8日
一般参加者：17組57名 参加学生数：6名
ツアー概要：「一迫ゆり園（ゆりの球根の植えつけ体験）→昼食（糰子かまどで炊いたお米と地元食材）→あやめの里（買い物）→サンクチュアリセンターつきだて館・内沼（栗駒山麓ジオパークのジオポイント）見学」



尚綱学院大学参加学生
プロジェクトリーダー
現代社会学科 3年
山田 裕貴

（第四回 感想）
第4回のツアーは、あいにくの雨でしたが無事に終えることができました。「一迫ゆり園」ではゆりの球根植えを行ったのですが、サイコロの5の目ように球根を並べていくという作業は特に難しくなく、楽しく球根植えができました。お昼には糰子を使ったかまどで炊いたひとめぼれとササニシキのご飯を食べさせていただきました。とてもおいしくおかわりをしたかったのですが、僕が行くころにはもうお飯は残っていなかったのを今でも覚えています。残念でした…
伊豆沼湖ではたくさんのカルガモを見ることができ、僕らも一緒にカルガモのえさやり体験を楽しませていただきました。（全体を通しての感想）

約一年間、僕は「今できることプロジェクト×栗原市」のバスツアーに関わらせていただきました。プロジェクトの初めの頃は、僕自身栗原に行ったことが無いということもあり、手探り状態でとても不安を感じていました。しかし、実際に何度も栗原に行き、そこで見たもの、会った人々に触れていく中、ツアーを重ねていくごとに楽しさを感じるようになっていました。これは一年間のツアーを通して一番の変化だったと思います。また、何度もバスツアーに参加していただいたお客様と顔見知りになって会話を楽しむことができたようになったことでも嬉しかったです。どちらかというツアースタッフというより、参加者として楽しんでしまった点多々ありましたが、充実した一年間だったと思います。お世話になった皆様、本当にありがとうございました。



開催日：2015年5月24日
一般参加者：27組56名 参加学生数：11名
ツアー概要：「田植え体験→昼食（地元料理のバイキング）→金成温泉延年閣 日帰り入浴→農産物直売所での買い物」



尚綱学院大学参加学生
生活環境学科 2年
阿部 杏圭

「食生活の基盤になるもの」これは第1回目のツアーに参加したことで、振り返るテーマとなったひとつです。普段何気無く口にするものを育てる生産者や地域、その環境を実際に見聞きした中でいくつか感じたことがありました。晴天に恵まれた初夏、開催されたツアーでは田植え体験・地産地消の昼食・地元食材が並ぶ産直市場・栗駒山を見晴らす金成延年閣と、農業体験や観光を通し栗原市の文化や魅力を感じるには十分の内容でした。特に、泥濘にはまりながら一束、一束手作業で稲を植えたむげよすざでの田植え体験では、普段意識せずに食べているお米がいかに手間をかけ作られているのか身を持って感じ、1日3食当たり前に食べられる日常に感謝するきっかけとなりました。また、むげよすざのような新緑の山々に囲まれた田園というも消えつつある日本の田園風景であり、米食の日本を支えてきた実際の姿です。こうした場所に足を運ぶことが自分たちの食生活の基盤を知り、守る一歩なのだと思います。栗原市にはこうした豊かな自然が今も尚残っています。これからも、そうした自然が生み出す食材の数々に目を向け、感謝を込めて「いただきます」と手を合わせたしたいと思います。



開催日：2016年2月21日
一般参加者：24組65名 参加学生数：16名
ツアー概要：「この花さくや姫プラザ（体験プログラム：ミニよすづくり・干し大根づくり・ミニ曇づくり）→昼食（地元食材と餅料理）れんこん掘り見学→旧くりはら田園鉄道若柳駅見学→わかやなぎ農産物直売所くりでん（買い物）」



尚綱学院大学参加学生
健康栄養学科 3年
加藤 怜菜

私が所属しているサークルFFFは、第5回目のツアーにおいて参加者や関係者の方々に栗原市の特産物「りんご」を使用したスイーツを提供させていただくことになりお話を受けました。試行錯誤を重ねた結果、りんごの包み揚げを提供させていただくこととなりました。自らがから考え、制作したものをツアーの参加者という多くの方々に召し上がっていただくことは、参加者の皆さんがどう反応するかと反応に緊張や不安がありました。しかし、完成していたうえ、子どもから大人まで幅広い年齢層の方々に笑顔で「美味しかった」という声をいただきました。試作や試食会をするなど時間をかけ、完成させたスイーツが好評だったことに、嬉しさと共に、無事終えられたことへの達成感が溢れました。食は笑顔を作ることでできるということを改めて感じました。また、生産者が見えることで、ひとはより食に興味を持つということを学びました。今回のツアーでは、栗原市の自然、食、伝統、文化など様々なことに触れ合いました。その中でFFFはスイーツを提供し、栗原市の特産物を多くの方々へ広められ、栗原市への「今できること」に繋がりました。

栗原のりんごを美味しいスイーツにする提案
本プロジェクトでは、私が顧問・担当している FFF サークルの学生がそれぞれ「自分に今できること」を考え、探し出し実行することを通して「課題解決」と位置づけました。FFFは Food For me For you の略で食べ物を通して様々な人と繋がり、健康でアクティブな活動をするを目的としています。そこで学生たちは、栗原で採れるりんごを利用して美味しく、喜んでいただけるスイーツを地元の方々やツアーの参加者に提案する取組をしました。FFFのメンバーが自主的に話し合い、りんごのより良い保存を考慮し「りんごコンポート」とその応用として「コンポートを利用したスイーツ」をいくつか考え出しました。事前にりんご農家さんからの情報をいただき、試作、試食を実施し関係者からご意見をいただくなどツアー当日まで美味しく、手際よく提供できるための工夫を重ね実施に至りました。学生からの感想では、今回、栗原の方々、関係者との自身の関わりを計画から実行まで身をもって体験し、文字通り「自分に今できること」を考え取り組んだプロジェクトであった振り返っております。



開催日：2015年7月25日～26日（1泊2日）
一般参加者：16組54名 参加学生数：8名
ツアー概要：「農業生産法人耕佑見学→My箸づくり体験 花山石楠花センターで昼食→そば蒔き体験→伝統芸能ハツ鹿踊り鑑賞→花山温泉温湯山荘で夕食&宿泊→道の駅路田里はなま自然薯の館で買い物→細倉メインパーク見学→くりこま山車まつり見学&昼食」



尚綱学院大学参加学生
プロジェクトリーダー
現代社会学科 3年
伊藤 心力

今できること × 栗原プロジェクト第2回のツアーにあたり、私達は三段階の取組みを行いました。まずは、ライター講座で、取材のテクニックや文章への起こし方を学び、次いで、実際に栗原市内の「むげよすざ」「古民家 岩松」「旧くりはら田園鉄道若柳駅」「わかやなぎ農産物直売所くりでん」「若柳地織」「只見工業所」を巡り取材を行い、それを河北コミュニティブログに記事として掲載しました。それを河北新報社の記者である大泉さんに添削していただきました。私は、社会調査士の資格課程を履修して、インタビュー調査等については、ある程度の知識は持っているつもりでしたが、今回授業では学ぶことのなかったその道のプロならではの取材のテクニックを学ぶことができました。また、取材ツアーでは、ライター講座で学んだことを意識しつつ取材を行い実践することで、学んだことをそこで終わらせず身につけることができたと思います。今後は卒業論文の執筆にあたり、インタビュー調査を行ったり文章をまとめることが多くなりますが、第2回ツアーで学んだことを実践して、より自分のものにしていきたいと考えています。



尚綱学院大学教員
藤本 吉則 准教授
現代社会学科
担当科目：地域づくり論、政治学入門
研究分野：行政学、公共政策論

栗原市合併10周年記念プロジェクトの総括
このプロジェクトは学生にとって大変有意義な事業でした。ツアーに参加したこと、大泉記者による学生ライター講座を受講したこと、一般のツアー参加者に取材したこと、SNS上で栗原市の魅力を伝える経験ができたこと、ツアーとは別に栗原市に出向き現地の様子を調査したこと、自分たちでツアー案を作成したこと、その案について栗原市の関係者からコメントを頂く機会があったことなど、普段の学生生活では得られな体験ができたのではないのでしょうか。その一方で、ツアーに参加して「栗原市に移住してみたいと思う人を増やす」や「移住しないまでももう一度栗原市を訪れて応援しようという人を増やす」というプロジェクトの目的に大学として貢献できたのか？と問われるとはなはだ心もとありません。もっとプロジェクトの目標達成のためできたことがあったのではないかと反省しています。もちろん、こういった目的は一度きりのイベントだけでは達成できないでしょうし、今後も継続した取り組みを行う必要があるでしょう。大学として「今できること」はなにか、みなさんも一緒に考えてみませんか。



尚綱学院大学教員
渡邊 千恵子 教授
環境構想学科
担当科目：ライフスタイル論
研究分野：家族社会学 他

栗原市と尚綱学院大学のつながり～地域を知り、地域の力になる!!～
この一年、延べ77人の学生が栗原市を訪れ、農業体験と観光を通して栗原の文化や産業、暮らしについて見て、聞いて、体験しました。そこで感じた栗原の魅力をどう伝えるか？本学の学生は大きなミッションを担いました。宮城県内でもっとも広い面積を持ち、自然と四季のうつろいが美しい田園都市、一方で人口減少や高齢化の進展等により活力が衰退している地域社会。学生は何に気づき、何を考えたでしょうか。研修から第5回のツアーまで、参加した学生が終始見つけたのは地に足がついた「暮らし」そのものでした。何をつくり、何を食べ、どのようにつながり、何を守っているのか、それはまさに人間の営みそのものであり、まさに現代社会において忘れられている側面だったように思います。

本学は総合人間科学部に6学科を配しています。人間の営みは当たり前ですが総合的なものです。文化、人とのつながり、次世代の育成、産業、自然との共生、食、これらすべてが地域の中で醸成されてこそ「より良い人間の暮らし」が実現します。今回のプロジェクトに参加した学生たちは、ミーティング・ライター講座・事前研修・5回のツアーを通して、栗原の魅力をどう伝えるかを考え、そして表現しました。もちろん、つたないところもありますが、彼らが栗原市に想いを馳せたことを大切にしたいと思います。東北の力になる人材育成を目指している本学にとって、今回のプロジェクトに関わることができたことは、大きな意味を持っています。このご縁は決して偶然ではないと思います。ひとつの縁が無限大に広がっていくこと、なんて楽しいことでしょうか。栗原市出身の学生、いえ栗原市と関わった学生が、本学で培った力を存分に活かし、栗原市を元気づける力になることを期待してやみません。

